

<座談会>楠本君恵教授退職記念座談会 マザー・グ ースの受容をめぐって

著者	楠本 君恵, 川戸 道昭, 鷺津 名都江, 吉本 和弘, 高屋 一成[司会]
出版者	法政大学経済学部学会
雑誌名	経済志林
巻	78
号	3
ページ	443-499
発行年	2011-02-25
URL	http://hdl.handle.net/10114/6291

第二部

楠本君恵教授 退職記念座談会

「マザー・グースの受容をめぐって」

開催日：2010年8月11日（水）

場 所：法政大学市ヶ谷キャンパス ボアソナードタワー19階
経済学部資料室会議室

参加者：楠本 君恵 法政大学経済学部教授

川戸 道昭 中央大学教授

鷺津 名都江 目白大学教授

吉本 和弘 県立広島大学准教授

司 会：高屋 一成 京都府立北桑田高等学校教諭

出席者紹介

高 屋 今日はお忙しい中、お運びいただき、ありがとうございます。

ただいまから法政大学経済学部学会誌『経済志林』の、楠本君恵先生の退職記念号を飾るマザー・グース座談会を始めます。本日はマザー・グースに関する研究、教育、出版などの各方面でご活躍しておられる皆様にお集まりいただきました。お示ししましたような次第で進めていきたいと思っています。なれない司会ではございますが、今日の座談会が有意義なものとなりますようにご協力をよろしくお願いいたします。

最初に皆様から一言ずつ、自己紹介をしていただきたいと思います。その際、近況等、簡単にお話しただけたらと思います。

川 戸 中央大学の川戸と申します。これまで比較文学を中心に研究を進めてまいりました。特に明治以降の日本文学に与えた外国文学の影響を中心に研究活動を行っております。



座談会の様子

最近ではいろいろな問題に関心があるのですが、特に日本における児童書の流れ、それも挿絵をともなう児童書の流れに興味を懐いています。その挿絵をともなう子供の本の歴史が、江戸からずっと続いている。それを、近世と近代を分けるのではなくて、一貫したかたちでたどることができる通史として編纂してみたいと考えています。イギリスでも挿絵をともなう子供の本の歴史書が数多く発行されていますが、それと同じかたちで日本の児童書史を編んでみたいと考えています。

鷺 津 目白大学の鷺津でございます。私は子どもの頃から30代まで歌の仕事を続けていましたので、小さいころから「ロンドンブリッジ」や「メリーさんの羊」、「きらきら星」などはうたっておりましたが、マザー・グース研究に入ったのは30代の後半です。歌をうたっていたこともあって、マザー・グースを英語で聞いたときの楽しさが、どんなにすばらしい詩人の方に訳していただいても、歌になるとなぜか、あの楽しい弾みというもののが日本語でうまく表現できない、これはどうしてなのかとずっと思っていましたし、現代にしっかり根付いていることも不思議でした。まだまだマザー・グース研究者としては駆け出しです。イギリスでは、マザー・グースを言語リズムの面から研究したり、日本に帰ってきてからは、日本での受容の研究になったり。最近、幼児教育、子供の英語教育でマザー・グースを使うといいというご意見をよく聞くのですが、それはどういう使い方が一番いいのだろうか。そういうようなことを、自分の大学での教授法と重ねながら、手探りで一方法を編み出せていけたらいいなと思っているところです。

吉 本 県立広島大学の吉本と申します。私は文学部の英文科出身ではなくて、広島大学総合科学部のイギリス研究ということでスタートしました。そこでは文学もやるのですが、地理だの社会だの歴史だの、いろいろなことをやって、何かイギリスに関係する卒論を書きなさいという、そういうところだったんです。

折しもといいますか、当時、高橋康也先生の『ナンセンス大全』や高山

宏先生の『アリス狩り』といった本が出ていたところで、そういう本にも非常に触発されたというのがあるんですが、イギリスのノンセンスの伝統に非常に面白さを感じて、卒論は実はマザー・グースについて書いたんです。マザー・グースに出てくるノンセンスの型の分類のようなことを書いたことを覚えています。その後はいろいろと別の方に関心が向かってしまい、現在はマザー・グース研究家とはとても言えないと思うので、ここに呼んでいただいたのも初めはびっくりしたんです。マザー・グースについては論文らしきものはほとんど書いていませんが、マザー・グースを英語教育に使うということは長年やってきました。実はこの6月に鷺津先生と中国四国イギリスロマン派学会という学会で「音で魅せるマザー・グース」というテーマでシンポジウムを一緒にやらせていただきました。それが一つのきっかけになって、また、研究材料としてマザー・グースに少し目を向けようという気になっているところです。

高 屋 司会を務めさせていただきます私は、京都府立北桑田高等学校の高屋一成と申します。私自身のことを言わせていただきますと、12月にマザーグース学会の大会が愛知県でありますので、雑誌『少女の友』に明治から昭和にかけて掲載されたマザー・グースの翻訳を紹介して、それぞれの時代の訳が映し出す時代の背景について発表ができればということを、最近は考えています。

研究領域

高 屋 それでは楠本先生が法政大学で勤め上げられた記念の会ですので、先生の業績を巡って、しばらくお話ができればと思います。先生は法政大学の経済学部の教授として教育に打ち込んでこられるとともに、日本ルイス・キャロル協会の創設メンバーの一人として、会の運営と研究に心血を注いでこられました。

キャロル協会では長年の間、理事として、また協会機関誌『^{ミッシュマッシュ}Mischmasch』の第1号から第10号まで編集委員として活躍してこられました。日本の内

外を問わず、キャロルの作品の愛好家やさまざまな分野の研究者がこの協会に加入していて、その国内外の協会員が毎回、多彩な論考を寄稿してきたのですが、協会と機関誌の発展は先生の熱意と実行力、お人柄によるところが大きいと考えています。

その間、並行して、キャロルについての数々の論考、著作を発表してこられましたが、アリスの物語の翻訳史と翻訳論を、『翻訳の国の「アリス」』というかたちで発表されました。この本は第25回の日本児童文学学会奨励賞を受賞されました。それから、キャロルを取り巻く人たちの人物像、作品のことを『出会いの国の「アリス」』として2007年に発表されました。先生、何かそのへんのことで一言いただけましたら。

楠 本 翻訳の興味からマザー・グースと『アリス』に入ったのですけれども、ここしばらく『アリス』にばかり没頭してしまっていて、マザー・グースについて書いたものは『アリス』のものを書く前だったので、またマザー・グースに返ってきたなという、そんな感じです。

『翻訳の国の「アリス」』で賞をいただいたのは、たまたま運がよかったからだけで、今見ると欠けたところがぽつぽつあって。これからこういう研究に興味のある若い方たちにそこを補っていただきたいと思います。

高 屋 鷺津先生のご研究とも、それから川戸先生のご研究とも重なるところが大きい著作ではないかと思うのですが、楠本先生のご研究は実に多彩でして、キャロル研究だけにとどまりません。マイノリティ研究やジェンダーの研究にも、日本人の女性という観点を生かして取り組んでられました。

法政大学経済学部学会誌『経済志林』75巻2号では、「ハリエット・ピーチャー・ストウ著『アンクルトムの小屋』：毀誉褒貶の軌跡」を2007年に著されて、作品が評価を受けたり、いろいろと批判にさらされたりした足跡を丹念にたどっておられます。それから、法政大学『多摩論集』第24巻では、黒人女性作家のアリス・ウォーカーについて、「アリス・ウォーカ

ー：闘う女神』を2008年に発表しております。その方面の研究に関しても、何か一言……。

楠 本 私は大学院のときの研究テーマがアメリカ南部女流作家研究でしたので、キャサリン・アン・ポーターを修論にしました。その後、ユードラ・ウェルティやフラナリー・オコナー、あのへんの女流作家が面白くて、しばらくそこを専門にしていました。

その後、急に知り合いが出版社をおこしまして、児童文学の翻訳をしてくれないかと。まだ、つくったばかりの会社で原稿料は保証できない、だから、さしあたって生活に困らない、ただでしてくれる人というので白羽の矢が立ったのです（笑）。当時私は高校に勤めていて、お給料をもらっていましたので、私でよければとお引き受けしました。

児童文学の翻訳を何冊かしているうちに、すごく日本語に興味が出てきてしまったんです。それで膨大な翻訳のある『アリス』の日本語、キャロルの英語がどんな日本語になっているかということに目が向いて。同時に磨き上げられた言葉の粋を集めたマザー・グースがどんな日本語になっているかということにも興味が出てきました。そのへんから長いあいだ『アリス』とマザー・グースを視野に入れてきたのですが、働いているのが経済学部なものですから、直接『アリス』やマザー・グースを授業に取り上げることはできませんでした。

ゼミでは南部女流文学をしていたときの関連から、インヒューマニティをテーマとして黒人問題を中心にホロコーストやアパルトヘイトなどを学生と一緒に考えてきました。お恥ずかしいことに、私はさまざまな分野に足を突っ込んで……。ですから、何もかも中途半端という感じで。一つの



楠本君恵氏

ことをもっと掘り下げていけばよかったのと思います。

学部で退職に際してこの座談会の企画をしてくださったとき、どの分野の方がたに集まっていたかで悩んでしまいました。本来なら、育てた弟子の方たちに来てもらえればいいのですが、教養教員としての悲しさで弟子といえる研究者が育っていないのです。アリスは食傷気味なくらいブームでしたので、以前、高橋康也先生が企画したノンセンスのマザー・グースの座談会、あれを思い出しました。それで、マザー・グースを今、専門にしていらっしゃる方がた、これから日本のマザー・グース研究の中心になっていかれる方がたにお集まりいただいて、マザー・グース研究の一つの一里塚になるような、少し異色な座談会ができればいいなと考えました。

そんなわけで今日、教育素材としてのマザー・グースや、マザー・グースの隠れた魅力、何よりも日本への受容、そんなことを大いに話していただこうと、先生方に集まっていただきました。よろしく願いいたします。

高 屋 出発点のところの黒人文学やジェンダー研究の成果は、そのあと先生が研究してこられた中に伏流水のようにずっと流れていると私は感じます。先生は短編小説の創作方面にも力を注いでこられたんですね。

楠 本 創作？ はい(笑)。山梨大学の時の恩師犬飼先生の主宰する同人誌に楽しんで書いていました。退職しても続けていくと思いますが、どうしても「作文」にしかなくて(笑)、お恥ずかしいです。

高 屋 それから同時に沢登君恵のペンネームで、先ほどおっしゃった児童文学の翻訳をしてこられたのですが、イギリスのレオン・ガーフィールドの『金色の影』では旺文社児童文学翻訳賞を受賞しておられます。これはギリシャ神話とそれを語る吟遊詩人がテーマになっているのですが、ガーフィールド自身が吟遊詩人と化してギリシャ神話を再話している感じで、ものすごい迫力です。私の子供に読み聞かせたのですが、ぐいぐいつられて聞いていました。その後で、ほかのギリシャ神話の本を買って一人で読んでましたが、そちらは読みごたえがないと(笑)。「どっちが面白か

った？」と言うと、「こっち！」と言うんです。

楠 本 ありがとうございます。

高 屋 ヘレン・ブッシュの『海辺のたから』では先生が受賞されたのではなくて、読書感想文を書いた新潟の女の子が全国学校図書館協議会長賞に輝くという、翻訳家冥利に尽きるご経験をされたと伺っています。

さらにその後、満を持して、ご自身の手で『不思議の国のアリス』の翻訳出版をされました。

楠 本 『不思議の国のアリス』の翻訳だけはするつもりはなかったのですが、たまたまアリスの原画展で惹かれた絵があったのです。その挿絵画家、ブライアン・パートリッジさんの挿絵のついた本がイギリスで二回もゲラまで出てから出版されなくなったことを知りました。確かにちょっと問題になりそうなところはあるのですが、的確に場面をとらえた魅力的な絵でした。それで、私がその絵の版權を買わせてもらったというわけです。

高 屋 この人の挿絵はナボコフの『ロリータ』を連想させるようなところが少しありますね。

楠 本 はい。日本では金子国義のような絵も問題にならないのですが。英国の児童書の世界は厳しいです。本人はユーモアのつもりでもすぐクレームがつけられてしまう。

高 屋 そうですか。しかし、イギリスのルイス・キャロル協会の子供向けのパンフレットには、彼が……

楠 本 表紙を描いていますね。

高 屋 エドワード・ウェイクリングさんが注釈をつけている『ルイス・キャロル日記』全巻の表紙絵もこの方ですね。

私は翻訳書を出したことがないんですけど、『アリス』の訳を出すすると注釈だらけになると思うんです。先生の翻訳には脚注も後注も全然なくて、訳文で勝負するという。

楠 本 本文の中に少し注っぽく、自分でほんの少しずつ説明を入れた箇所はあります。

高 屋 言葉遊びがあるとたいがい、こういうことだからと説明して逃げてしまうんですが。たとえば、ネズミがアリスに、私の話は、“the sad and long tale”，つまり長く悲しいお話ですというのを、アリスはしっぽのtailに聞き間違えて、「長いしっぽというのはわかるけれども、どうして悲しいのかな？」と思うところがあります。これはひどく訳にくいのですが、先生は、「私の話、しっぽりと泣けるような長い話です」と訳しておられて、説明抜きで楽しめるように。

鷺 津 そういうニュアンスをわかってくれる子供だといいですね(笑)。

楠 本 そうですね、読者を子供と限定すると確かに少し難しいですね。

鷺 津 「しっぽり」なんていう言葉を今の子供が知っていたらいいと思います(笑)。

白秋とまざあ・ぐうす

高 屋 そうしましたら、今日の大きなテーマであるマザー・グース関係の楠本先生の論考に移らせていただきます。二足わらじというのはよくない意味で使うことばですが、楠本先生は二足どころか、百足、ムカデ状態で活動を続けてこられて(笑)、マザー・グースの分野においても大いに力を注いでこられました。

1991年には法政大学『多摩論集』第7巻で「白秋とまざあ・ぐうす」を発表されました。この論考は本文だけで51ページというすごい長さです。児童文学雑誌『赤い鳥』の編集者であった鈴木三重吉と白秋との関係の移り変わり、それから白秋と西條八十の童謡観の違い、それと並行して、二人のマザー・グースのとらえ方の違い、その結果生じた二人の作風の違いなどについて、いろいろ資料を駆使して生き生きと描き出しておられます。

八十がやや悪者に描かれているくらいは感じるのですけれども(笑)。

楠 本 はい、確かにそうでした(笑)。

鷺 津 確かに白秋と八十は本当に違います。5年前、神奈川近代文学館で白秋、八十、その後継者たちの企画展がありました、そのときのカ

タログに寄せる文の中で私もちらっと白秋と八十のマザー・グースに対する考え方が180度違うということに触れました。これを読ませていただいて、先生もそのへんをちゃんと突いてしっかり調べていらしていると思いました。八十は全くマザー・グースを評価していないのですよね。

高 屋 八十の童謡論を書いた、何という本でしたか、先生は这其中で言及していらっしゃいますね。

楠 本 『現代童謡講話』でしたか。

高 屋 その最初にマザー・グース訳が出てくるのですが、八十はマザー・グースを否定するために枕として持ってきていますね。

鷲 津 実は私が子供のころに講談社から「世界少年少女文学全集」が毎月1巻ずつ出版されて、とても楽しみにしていましたが、その第50巻『世界少年少女詩集 世界童謡集』の編者の一人に八十が入っています。マザー・グースももちろん載っていますが、八十訳は本当に少ししか入っていません。しかも八十は、その巻末の解説の中でイギリスの伝承童謡について、「あんな調子だけでおもしろくうたわせる歌はほとんど芸術的な価値をもっていない」なんて……(笑)。本当にマザー・グースに関して否定的というのがはっきりわかるようなことが書いてありました。

ですから、本当に北原白秋と180度違うマザー・グースに対しての見方があって面白いといえますか、それが如実に先生の実作、論考の中には詳しくいろいろ書かれています。

川 戸 私が一番面白いと思ったのは、単に白秋とマザー・グースの関係という狭い範囲に限るのではなくて、もう少し視野を大きく持って、鈴木三重吉の提唱する『赤い鳥』の文学運動・童謡運動との関連においてそ



川戸道昭氏



鷺津名都江氏

の関係がとらえられている点です。

大正7年7月に『赤い鳥』が創刊され、昭和11年に廃刊されるまでの一連の童謡・童話をめぐる文学活動が、白秋のマザー・グースの翻訳という観点から浮き彫りにされていく、その点が大変魅力的でした。

高屋 時代の中で白秋のしたことがわかるというか、白秋の童謡もわかるし、その中で白秋のマザー・グース

訳もわかるという、そういう描き方ですね。

川戸 同時に白秋の『赤い鳥』を拠点とする重要な文学運動に、マザー・グースがこんなに深く関わっているということに、大変驚きを感じました。どうしてそんなに深くかかわることになったのだらうと思ったのですが、よく考えてみると、白秋の童謡運動の根幹には、わらべうたの伝統に則って日本の童謡を復興させるという考えがありました。そのわらべうたというのはもちろん日本のわらべうたなのですが、同時にイギリスのわらべうたも大いに利用されました。

『赤い鳥』に掲載された白秋のマザー・グースの翻訳がまとめられて1冊の本として刊行されたときの広告には、「原謡の内容と動律の本質とを純然たる日本の民謡調を以て訳出した此一巻は実に原謡以上の妙味を持つ素晴らしい創作と云ふべきであります」と書かれています。

楠本先生のご論考は、白秋のマザー・グースの翻訳に視点を定めて、それをもとに白秋の新しい童謡運動の流れをたどっていくという全体の構想が、私には非常に魅力的に感じられました。

それともう一つ、私が感心したのは、論旨の展開方法です。最初に「お山の大將」という、白秋と八十の同じタイトルの詩を持ってきて、二人の童謡観の違いを提示する。それを枕にして、最後に、今度はもう一度、最

初のものとは違う白秋の「お山の大将」の詩をもってきて、鈴木三重吉との関係が破局へと向かう原因を暗示するものとして提示する、その組み立て方のうまさに感心しました。

高 屋 面白いですね。

川 戸 単に論文として優れているばかりか、読み物としても非常に面白い。

結果として、五十数頁のものを一気に読み通すことができました。それでいて、読み終わったときには、『赤い鳥』をとおした白秋の童謡運動が、内容として一通り頭の中に入っている。やはり、ここにあるような『不思議の国のアリス』の翻訳や、独自の創作活動を通して培ってきた作品の構成力が、その根底にはあるのだな、ということを強く感じました。

高 屋 研究と同時に一つの文学になっているというか。

川 戸 それと、皆さんお感じになっていることだと思いますが、文章が洗練されていて大変読みやすい。その点にも大いに感心しました。

高 屋 仕事でしておられるというよりは、遊び心のようなものを感じるので、だから、つられて、ひかれて読むというところか。

楠 本 少し言い訳をしますと（笑）、実はあの論考ではただ『赤い鳥』だけに目を向けていました。『金の船』や『童話』などあそこ出ている同類の雑誌をみんな調べた上で書くべきだったのだと思います。白秋についても、まだ欠けたところがいっぱいありますし、独断に走った感じがします。ただ、何か一気に書いてしまったという感じで。

高 屋 文章に勢いを感じます。

楠 本 いろいろなことを知らないということが、そこに集中したことになったのかもしれないですけど。

鷺 津 余計なところがないからこそ、鈴木三重吉と白秋と西條八十のトライアングルが非常にうまく織りなされている。そして最後にすんと、西條八十が文学的な評価としては、つまり詩人としてはどうかかわからないけれども経済的には「お山の大将」になったという（笑）、あの下りの落と

し方など非常に。

川 戸 上手ですね。

楠 本 自分で自分の書きたいことのためにあちこち取ってきたという、そんな感じです。だから、八十を調べている方たちからすれば不満だらけだし、『赤い鳥』を調べている方からも不満だし、白秋からもと、それは承知の上なんですけれども、ありがとうございます。

川 戸 ただ、ああいうかたちで白秋と八十が対立して、八十が『赤い鳥』をはなれ、『赤い鳥』のライバル誌『童話』に移る。そして、その創作童謡欄の選者となって、金子みすゞのような童謡詩人を見いだす。一方、白秋が担当する『赤い鳥』の創作童謡のコーナーからは異聖歌のような詩人が生まれる。

楠 本 はい、与田準一なども。

川 戸 それは、かたちとしては童話・童謡を一般から募集して優秀なものを誌上で推奨するという同じことをしているのですが、選者となる詩人と、大体においてその感性や方向性を一にする新しい童謡詩人が生まれてくる、非常に面白い文学運動だなと私は思いました。

高 屋 藤田圭雄さんも白秋のほうにつながっておられて、そこに私は鷺津名都江先生がつながっておられるのではないかと（笑）。

鷺 津 いえ、藤田先生にすごくかわいがっていただいたのは事実ですが、私が藤田先生につながっているなんて、とてもとても……（笑）。イギリスに行くときには「がんばって行ってらっしゃいね」と応援をしていたいたのですけれども。

話がそれますが、藤田先生はやはり鋭い視点をお持ちで、いろいろな童謡史の論評などもなさっていますが、私などは本当に最初チビで童謡歌手として出ていたころ、「苦々しく思っていた」とおっしゃる先生なのです。後に私が、久留島武彦文化賞をいただいたときの選考委員長が藤田先生で、その授賞式のときにはそうそうたる先生方の中で小さくなっていました。

そのときに藤田先生が私の授賞理由について話されて、「この小鳩くるみ

という人はこまっしゃくれていて、小さいときは大嫌いな人間だったけれども、年を取るにつれて法華の太鼓のようにどんどんとよくなり、ぼくはだんだんだんだん好きになっていって……。これからがんばってくださると思う」と（笑）。

まだそのころは歌い手でしたけれども、大学で英語を教えるようになり、イギリスに勉強に行きますというお話をしたときに、「ああ、それはいいことだから、一生懸命なさい。ああいう世界よりも、本当にあなたはこつこつと勉強することが向いているから」と。イギリスに行ってからはずいぶん励ましの手紙をいただきました。

私が非常にうれしかったのは、『マザー・グースと日本人』を吉川弘文館から出したときに『赤とんぼ』という雑誌を調べました。誰の訳か明記されていないマザー・グースが出ていましたが、これは絶対、藤田先生の詩でしようと思って、それを書きました。その後、マザー・グース学会の方がちゃんと調べてくださって。

高 屋 鈴木直子さんですね。

鷺 津 そうです。藤田先生のところからそういう原稿が出てきたというのを伺って、ああ、間違っていなかった。洒脱で、非常にリズムカルなあの訳詩は藤田先生でないかと。そういう意味では北原白秋から藤田先生はつながってきていますよね。

高 屋 鷺津先生が満を持したように『よもう うたおう！ マザー・グース』の翻訳とCDを出されたのにも、白秋からまっすぐな流れを感じます（笑）。

鷺 津 そんな恐れ多い。とんでもございません（笑）。ただ、日本語でもうたって弾みを感じられるような訳を心がけました。

吉 本 私はこの分野に不勉強で詳しくないのであまり発言できないのですが、楠本先生のこの論考で日本のわらべ歌をいろいろなかたちで発展させて残していこうという芸術家たちの確執、活動について本当に勉強させていただきました。

この論文を読んで思ったのは、やはりマザー・グースは変わらずに何百年もずっと続いていて、今も生き続けている。片や、日本のわらべ歌がなかなか現在に残っていないというか、マザー・グースほどの力を持ち得ていないという現実があると思うんです。よく言われる明治期やこの時代のいろいろな活動が、逆に日本のわらべ歌にあまりよくない影響を与えたという説もあるじゃないですか。

その中でマザー・グースが面白いかたちで、日本のいろいろな活動に影響を与えていたというか、インスピレーションを与えたのだけでも、マザー・グースの力に日本のわらべ歌が匹敵できなかった、そういう流れが拡散してしまったということを理解させてくれるすぐれた解説を読ませていただいたという感じを受けました。

鷺 津 この論文ではなくて、「日本のわらべうたとマザー・グース」のほうが。

川 戸 そうですね。その比較のほうが面白いんですけどもね。今はここに限るんですよ（笑）。言いたいことはたくさんあるのですが（笑）。

マザー・グースとレイシズム

高 屋 話の流れとしては少し飛ぶかもしれないのですが、1998年の法政大学『多摩論集』第14巻の楠本先生の論文「ナーサリィ・ライム革命」が時間的にはその次に発表されたのですけれども。

鷺 津 これはこれで、また非常に新しいマザー・グースの分析のしかたというか。階級社会のイギリスの中での受け取られ方、解釈のしかたが、違った見方をするとこういう解釈もできるという、非常に面白い論考でしたね。

高 屋 これは表紙だけですが、先生が取り上げられた本の表紙をカラーコピーしたものです。手前のペットショップで小鳥を売っていて、その横がマザー・グースさんでしょうか。

鷺 津 そうですね。おばあさんがガチョウを抱えています。

高 屋 その向こうを見ると、中央あたりに黒い帽子をかぶって、歩いて行く人がいますね。この人は明らかにユダヤ系の人ですね。ですから、このCable Streetはロンドンのイーストエンドにあるんですけど、ユダヤ人も多く住んでいるし、いろいろな人種が住んでいる地区ということで、『Cable Streetにマザー・グースがやってきた』という本のタイトルでは象徴的にその地名が使われているような気がするんです。

楠 本 本当にびっくりしたのは、この薄い本がケンブリッジのユニヴァーシティ・ライブラリーのレアブック・コーナーにありまして、わざわざ頼まないと出してもらえなかったのです。だから、一回限りで発行は終わったということでしょう。勇気のある出版だったんだろうと思うんです。ということは、まだイギリス社会は脅威を感じているというか。

吉 本 この出版について、何かマイナス的な反応があったのでしょうか。

鷲 津 というか、中産階級からクレームがついたんでしょうね。

楠 本 そうだと思います。でも、文書で記録を残したら大変なことになるでしょうから。無言の圧力でしょうか。

鷲 津 日本でいう「マザー・グース」は、イギリスでは一般的に「ナーサリー・ライム」と言われていますが、ナーサリー・ライムを直訳すれば「子供部屋の押韻詩」ということで、文字どおりもともとイギリス中・上流階級の幼児の子供部屋で伝わってきたと言われているんですね。私の大きな疑問の一つは、日本では伝承のわらべ歌がどんどん廃れていくように思えるけれど、マザー・グースのイギリスでの浸透度はどうなのかということでした。そこでミセス・オーピーにお会いしたときにお聞きしてみました。すると、『The Oxford Dictionary of Nursery Rhymes』（以下『ODNR』とする）の中にも書いてありましたが、「戦後の豊かな時代になるまではマザー・グースの絵本なども上流階級、中流階級しか買えず、マザー・グースはいわゆる限られた上流階級、中産階級だけのものだったけれども、戦後、多くの労働階級の人達がマザー・グース絵本などを子供に与え、ある

意味では昔よりもナーサリー・ライムは知っている人が広がっている」という言い方をなさいました。

「そのへんは日本のわらべ歌と全然違いますね」とお話ししましたが、マザー・グース受容の底辺は広がっていても、今度はその解釈のしかたですよ。上からの目線で解釈したり、受け取っていたものを、ちょっと視点を変えとこういう解釈もできるのだということを、この絵本が表現していて、それに目を留められたのはさすがだと思います。

高 屋 ジェンダー研究やマイノリティ研究の先生の視点が、マザー・グース研究にも生きているというか。

鷲 津 そうですね。あの、どうなのでしょう。色々な対象に先生が調査されたアンケート結果でも、“Baa, baa, black sheep”は全部、上位に出ていましたね。私がリサーチしたときも、子供に「何が好き？」というのと、“Baa, baa, black sheep”を挙げる子が多かったのですが、そのracismの観点から、ある小学校では“Baa, baa, black sheep”ではなく“Moo, moo, Jersey cow, Have you any milk?”と変えてうたわせる、要するにblackというのがだめというのでビックリしました。

そのときは、そこまでracismに考えるのはと思っていました。それが去年、知人がやはり、「最近、“Baa, baa, black sheep”はnursery schoolやinfant schoolで教えないのよね」と言うのです。「なぜ？」ときいたら、「“Black”でしょう、だから」と。

楠 本 そうですか。私が調査したのがケンブリッジに限られた、白人中心の社会だったからでしょうか。非白人も少しはいましたが、この唄に対してracismだという批判のようなものは一切受けませんでした。

鷲 津 本当に、やはり少し行きすぎ。日本の差別用語も本当に行きすぎと思いますが、放送界にかかわっていましたので、ものすごくそういう言葉には気をつけていました。それこそ昔からの表現で、たとえば「めくら縞」だとか「つんぼさじき」とか、その表現がピッタリと思っても使えないわけです。それと同じように“Baa, baa, black sheep”が人種差別とい

うのも本当に行きすぎで、そういう傾向が強くなってきたのかしらと、少し危惧しているんです。

ただ、イギリス社会はものすごく、ある意味ではバランス感覚がいいんですね。ですから、そういう批判が出て、必ず元に揺れ戻して残っている。それがナーサリー・ライムの伝承の根強さの一つではないかと私は思っています。

そのへんがアメリカとイギリスとの国民性の違いでもある。アメリカの方がそういうものに対して強硬ですね。

高 屋 バッシングが厳しいんですか。

鷺 津 ええ。いい例がアガサ・クリスティの『And Then There Were None』。あれなどはイギリスの本を見ると、まだniggerで出ているのがたくさんあります。

高 屋 “Ten little nigger boys” の形ですね。

鷺 津 でも、アメリカでは絶対だめですよ。今、Indianもだめで、どうなっているのかしらと思っていますけれども。

高 屋 “Baa, baa, black sheep” の歌詞は、“Moo, moo, Jersey cow” になるんですか。

鷺 津 そうですね～。“Have you any milk?” になる（笑）。

楠 本 私が調査に行ったときも、「ぼくたちはこううたうんだよ」と言って、その“Moo, moo”をうたってくれました。“Moo, moo, white cow”って。でも、それも子供たち同士の間で、自然にあの唄が出てきたと思ってたんです。今、お聞きして、わかりました。大人の意図があったんですね。

鷺 津 私はnursery schoolの先生から、「今はこういうふうに変えてうたわせている。それはracismの観点で」という話を聞きました。

川 戸 それは必ずしもマザー・グースだけではなくて、たとえば日本における『ちびくろさんぼ』の翻訳の問題もまさにそれですよ。それを実際に規制されるのか、あるいは自主的に引っ込めてしまうのか。アメリ

カで出版された改変本を底本としていた岩波版は今では絶版となっています。

しかし、もとはといえばそれはイギリス人が書いたインドを舞台としたお話なんですね。最近では日本だけでなくアメリカでも、この子供たちに人気の高かった絵本を、差別的な部分を取りのぞいて新しい絵本としてよみがえらせようという試みがあるようです。

つまり、かたちを変えて生き残る。ただ、同じかたちを変えるにも、マザー・グースは日本のわらべうたなどと比べて、ずいぶん根強いですね。

鷲 津 打たれても、まだどこかで。

川 戸 また違うかたちとして（笑）。

鷲 津 それがマザー・グースの根強さ。たとえば“Ding, dong, bell”，ネコを井戸に投げ入れるという、あれも一時、訂正版が出たんですよね、残酷だからと言って。「ネコはネズミちゃんと仲良く遊びます」というような改作が出て、結局それは浸透しなかった（笑）。

ですから、『Cable Street』のようなものでも発禁にしないで見せてくださるといいのにね。

楠 本 そうですね。マザー・グースの新しい見方、ふところの深さというものが感じられる絵本ですから。

高 屋 調べると、ひょっとしたら今また再販しているかもしれませんね。

楠 本 その可能性はありますね。イギリスはさっき鷲津先生がおっしゃったようにバランス感覚のある国ですから。たまたま、あの時代、ちょっとだけ売られてなかったのかも知れません。

実態調査

高 屋 それから、2000年には法政大学『多摩論集』第16巻に「英国伝承童謡の実態調査及び言語教育の中でのライム」を出されました。代表的な伝承童謡をこういうかたちで絵本からピックアップするというのは、行

われていてしかるべきなのですが、誰もこれまでしておられなかったんじゃないでしょうか。

鷺 津 実は私はそれを望んでいたんです。こういう研究がない。私のもともとの興味は現代に生きるマザー・グースの実態でした。日本ではわらべ歌がだんだんすたれてきているように見えるのに、どうもイギリスは大人と子供の共通文化になっているようだし、今なお受け継がれている。それはどうしてなのかということをずっと思っていました。それでイギリスへ行って、幼稚園や子供のいるご家庭に入り込んで、実際、本当にマザー・グースがどのくらい生きているのかしらというのを研究したいと思っていました。そして初めてイギリスではマザー・グースではなくて、ナーサリー・ライムという言葉で言われているのだということも知ったのです。1986年に私が行ったときにはそういう調査がなくて、アンケートを取るよりも、まず本当にナーサリー・ライムが今でも生活に密着していて自然に出てくるのかどうか。それを自分の目で見たいと思い、それこそテープレコーダーとカメラを持ち歩いて、まだビデオカメラを持っていなかったものですから（笑）。誰もこういう調査をしていらっしゃらなかった。

この後にアメリカでの調査をなさった方がいらっしゃいましたよね。

楠 本 いました、はい。アメリカでの実態を調べた『大人になってから読むマザー・グース』という本だったと思います。

鷺 津 アメリカの調査と先生の調査を見ると少し違うなというところがあって、その比較も結構面白い。

高 屋 そうなんですか。

鷺 津 楠本先生は、本当にケンブリッジの一部での調査とおっしゃいますが、私がロンドンのリサーチで得た感触と合致するのです。ですから、この調査はケンブリッジの一区画だけではなくて、イギリスの、特にイングランドですよ、イングランドのかなり広いところでは同じような結果が、どこに行っても出るのではないかしらということ、読ませていただいて感じました。



吉本和弘氏

川 戸 私も非常にそれを感じました。私は北のヨークという街に2年滞在していました。そのヨークで、祖母、母、娘の3代からなる家族と仲がよかったんですが、祖母が90歳、真ん中の母親が60歳前後、娘がケンブリッジ大学出身の30歳前後。その人たちがみんなナーサリー・ライムを知っているんです。それも、知っている量が普通じゃないんです（笑）。

ヨークは鉄道の街ですから、ワーキング・クラスの人が多い。今おっしゃっていたとおり、戦後にはワーキング・クラスの人々にもかなり広がったという。

鷲 津 ええ。ミセス・オーピーは、戦後になってワーキング・クラスこそ、もともとは中上流階級のナーサリー・ライムを自分たちのものにしたいと言って、買える財力が出てくると絵本を子供たちに与えて、ナーサリー・ライムを広めているとおっしゃっていました。

川 戸 その話が面白かったので、実際に行きつけのパブへ行ってナーサリー・ライムの話を出してみたんです。知っているかと聞くと、ほとんどの人が知っていて、楠本先生の実態調査の識詩率とだいたい一致するんです。先生の造語の識詩率というのがとても面白い用語だと思いました。

鷲 津 要するに識詩率ということは耳で聞いてうたえるだけではなくて、書けるということですね（笑）。

川 戸 そうですね。そして楠本先生の実態調査の60%、70%という高い識詩率が私が感じたものとピッタリ一致しました。この実態調査は私にとっても非常に面白かったです。

地方によっていろいろ地域差があるのでしょうかけれど、少なくとも私のいたヨーク地方ではそういう感じだったと思います。

鷺 津 ロンドン大学で書いた修士論文は、その後翻訳して、『わらべうたとナーサリー・ライム』として出版しましたが、論文を書くために小学校や幼稚園、たぶん十何校に2週間くらいずつリサーチに行きました。4人子供がいる家庭にも2週間ぐらい行ったりしています。自然に出てくる場所でなければ意味がありませんから。

ミセス・オーピーたちは聞き取り調査をして集めていますよね。そうではなくて、自然の中でどう出てくるのかが知りたかったのです。おかしいのは、「うちの学校では old nursery rhymesは全くやっていません」と言っていて、新しい歌ばかり聞かせてくださった学校もあるんです。でも、そういう学校でも本棚にはナーサリー・ライムの本がちゃんとあるのです。

本当に歌というよりも、詩, rhyme。それを英語のリズムにのせて口ずさむ。そういう感じでイギリスに定着しているなという感覚と、楠本先生の調査は非常にぴったりきていまして、あ、こうしてきちんと理論の裏づけをしてくださるとありがたいわと思って拝読しました（笑）。

高 屋 これを英語で書き直して、向こうで問われても面白いかもしれません（笑）。

吉 本 私は今、卒論を書こうとしている学生を一人指導しています。その学生は去年、イギリス南部の町のブライトンに数カ月滞在して、マザー・グースというものに初めて触れて非常に関心を持ったらしいんです。先生のおやりになったような実態調査、つまりどれぐらい皆がどんな歌を知っているのか調べてみたいというアイデアを持っているんです。それで、たまたま今回の座談会用にこの論文を見せていただいていたので、この論文を参考にして何かやってみたらという提案をしてみました。

彼女の場合は地域性、ある地域にはこの歌が好まれるという傾向があるんだろうかというようなことに関心があるんです。彼女がいたのがブライトンなので、サセックス地方の人たちが好むマザー・グースは何なのか、他との違いがあるのだろうかというようなことを調査したいということです。先生のこの質問のやり方を参考にさせていただいて、有名なものをリ

ストアップしたうえで、質問票を作ることになっています。実際に彼女がそこへ行って調査することはできないものですから、今インターネット時代なので、幼稚園やナーサリーにメールで質問票を送ろうという訳です。そして、どの歌を教えているかとか、先生方はどの歌を好きであるかとか、おたくのナーサリーではどの歌をよくうたわせていますかとか、そういう質問で調査しようとしているんです。

まだ結果は出ていないのですが、楠本先生のご研究はそういういろいろな実態調査の元祖になるすごく画期的な調査だったと思うんです。

高 屋 実際足を運んでらっしゃるので、強いですね。

川 戸 地域性というのも興味深いのですが、楠本先生の年齢によるちがいのいうのも面白かったですね。高齢者になると好きなものがそれぞれちがってくる。それが面白いですね。

楠 本 人生経験で心に響くものが変わっていくということですね。

鷺 津 楠本先生がお入れにならなくて、現地の小学校の先生が入れたという“*I'm a little teapot*”や“*Round and round the garden*”。私が向こうに行ったときに、ナーサリー・ライムを調べるならオーピーの『ODNR』と『*This Little Puffin*』（以下『*T L P*』とする）は絶対必要といろんな人に言われました。この『*This Little Puffin*』は、1969年に幼稚園の各地の先生たちが伝承で使っているものをとにかく集めて本にしたものですが、私が24年前に行ったときにすでに何版も版を重ねていました。その中に、この“*Round and round the garden*”とか“*Here is the church*”とかほとんど載っています。

マザー・グースの範囲は？

鷺 津 ですから、難しいのはマザー・グースの範疇をどのように考えるのかということです。いろいろなマザー・グース集を見ても、編者の感覚によって全部違います。ある意味ではアバウトで、どうにでもなると思うのですが（笑）。

楠 本 マザー・グースが総体としてたくさんあるから、いろいろな本が作れるんですよね。

鷺 津 学問として、どのように定義づけるかというとても非常に難しい問題で。

高 屋 自然とその話に入っていますね。私のほうから言わせてもらおうと思っていたんですが。

鷺 津 楠本先生がお入れにならなかったマザー・グースはほとんど、『TLP』に入っていると申しましたが、イギリスの幼稚園・保育園の先生たちはかなりあの本を使っているのです。ですから、本当に小さい赤ちゃんや幼児、乳幼児ぐらいだと、『TLP』からのものの方がひょっとしたら認知度が高いかもしれません。

高 屋 それはお母さんが読むためのペーパーバックの本ですか、それとも子ども向けの大きい絵本ですか。

鷺 津 ペーパーバックです。絵本ではなくて、中に楽譜や遊び方も書いてある先生や親向けの本です。最初、私が買ったときは赤地の小型本でしたが、何年前かに加筆修正されまして、黄色い本で、同じペーパーバックですが、少しサイズも大きくなり、数も少し増えていました。

高 屋 ペーパーバックでそういう本もイギリスのマザー・グース・リバイバルというか、普及を後押しするところが。

鷺 津 そう思います。遊び歌が主で、乳幼児向けのものがたくさん集められている。そこには本当にこれは old なのかなと思うものも実はあるのです。新しいものがどんどん加わって。

高 屋 入ってくるんですね。「メリーさんの羊」や「きらきら星」の次に、新しいけれども、どんどん仲間入りをしてきているんですね。

鷺 津 マザー・グースの定義をどのようにするか。新しいものもどんどん加わっていくし、古いものでなくなっていくものもある。もちろんこれは伝承の特質なのですが。では、どこからがマザー・グースと言えるかというと、新しいものなどはほとんど作者がわかりますね。しかし「人々

が作者を忘れて、パロディができるようになったら、マザー・グースの仲間入りをしたことになる」というようなことをオーピー夫妻は言っています。

“Twinkle, twinkle, little star” などでも、最初はちゃんとジェーン・テイラーと出ているんです。それが消えていって、そしてアメリカなどに渡ると、アメリカの教科書に載っている“Twinkle, twinkle, little star”は変わっています。すごく宗教的に変わっていますよね。

川 戸 そうですね。

鷺 津 ですから、もともとのジェーン・テイラーのと違うところもあるわけです。それから、アリスの話の中にも“Twinkle, twinkle, little bat!”なんて出てきます。オーピー夫妻が言うように、そのようにパロディ化されてきて、作者が忘れられたらマザー・グースの仲間入りをしたと、ある程度考えていいのかなと。

高 屋 話がそれで申し訳ないのですが、アメリカの“Twinkle, twinkle, little star”というのは？

川 戸 『Willson Reader』ですよ。

高 屋 あれはジェーン・テイラーが考えた歌ではないんですか。

鷺 津 オリジナルはジェーン・テイラーの詩です。ジェーン・テイラーが姉のアン・テイラーと一緒に出した詩集があって、その中に“The Star”というタイトルで出ている5連の詩です。

高 屋 最後のほうの連で、闇夜を照らす一つの星があって、それが旅人を導くというのは、キリストのたとえですね。

川 戸 それが実際、キリスト教と結びつけられる。『Willson Reader』というのはキリスト教色が非常に強いものですから、第3連以降の原詩が大きく変えられて、そこにはっきりと“God”という文字が書き加えられている。それがアメリカの幼児教育というか、初等英語教育に使われているわけです。

鷺 津 宗教教育の一つに。ですから、原詩とところどころ違っている

部分があるものが『Willson Reader』には載っているのですね。

高 屋 確かにパロディが作られたということは、伝承の領域に踏み込んでいるということが言えますね。

楠 本 どんなにいじられても作者が怒らない、公のものになったということですね。

川 戸 オーピー夫妻が編んだときが1950年代、それ以降新しいものがどんどん加えられているということですよ。

鷺 津 ミセス・オーピーとはロンドン留学中にお会いしました。今もまだお元気だと思いますが。

楠 本 どうでしょう。十何年か前にご連絡したときでも、もう誰にも会いたくないと。

鷺 津 そうなのです。もう何年も前からだめなのです。でも亡くなったという記事は出ていませんね。ですから、まだご存命ではないかなとは思いますが。86年に私が渡英したときですら、こんなによく知られているマザー・グースなのに、なぜオーピー夫妻は『ODNR』に入れていないのだらうという詩もたくさんありました。そして、それ以降にも増えてきて、「あれ、これは新しいのに」と思うものがもう今や新しい絵本には入っていることがあります。あれは本当に選者の好みと判断にもよりますよね。

楠 本 私もそう思います。編者がこっそり自分のものをすべり込ませているかもしれないですよ（笑）。

川 戸 ただ、その1世紀前にハリウェルが編んだ本とオーピー夫妻が編んだ本の収録数を比べると、1、2割ぐらいしか違っていません。すでに600篇ぐらいのものがハリウェルの本には収録されている。そこに今度は850篇あまりを収録するものとしてオーピー夫妻が編纂しているわけですが、その時点でなぜ外してしまったのか。あるいは、鷺津先生が載っていないというのは、それ以降作られた新しいものなののでしょうか、そのへんはどうなのでしょう。

鷺 津 ハリウェルに載っていても、オーピーに載っていないものもあ

りますし。

川 戸 そうなんですか。それと、オーピー夫妻の本に載っていないで、鷺津先生がいろいろな本で見かけるといのは、基本的に新しいものと考えて。

鷺 津 いえ、古いものでも『ODNR』に載っていないものがある。

川 戸 それはかなり編者の都合というものを考えていいわけでしょうか。

鷺 津 そうです。多分にオーピー夫妻は非道徳的なものは避けています。

川 戸 そういうわけですね。価値観が入るわけですね。

鷺 津 もちろん価値観が入ると思います。

楠 本 平野敬一先生が前に書いておられたのを読んだのですが、最も狭くすればマザー・グースといえるものは、『Mother Goose's Melody』に出ている50数編だけではないかと。

川 戸 18世紀後半にニューベリーが編んだ。

楠 本 はい、それです。もし広義に言うならば、およそ英語圏で伝承されているものすべてが入るのではないかと。数を限定するのは、私もおよそ不可能だろうと思います。

川 戸 ナーサリー・ライムという言葉を使えば、すべてが入りますよね。

楠 本 すべて入ってしまいますね。私も一度、アイオナ・オーピーさんに手紙を書いたことがあります。ちょうど平野敬一先生が、「英語学者はどれがマザー・グースかと言われた場合は軽蔑するだろう」というようなことを書いておられましたが、私は同じ質問をしてしまったんです。

鷺 津 お答えは？

楠 本 そうしたら、答えは、今、鷺津先生言われたように、作者が誰かが問題でなくなればと。そのときは、「パロディに使われるようになったら」という、素敵な答えは返ってきませんでしたが。ですから、今、学校

で子供たちがうたっているスクール・ライムズの中からもマザー・グースに入っていくものはあるだろうと、書いてこられました。

鷺 津 私がおいしたのは1990年でした。

高 屋 ビクトリア朝でクリスティーナ・ロセッティが『Sing-Song』という童謡集を出したときに、“A Nursery Rhyme Book”という副題をつけていますね。

鷺 津 実はナーサリー・ライムというのはold nursery rhymesだけではないんです。イギリスの書店に行くとナーサリー・ライムのコーナーがありますから、見に行きますが、うっかりすると新作のナーサリー・ライム集を手にとることがたくさんあるんです。

「伝承の」という意味では、正確にはtraditional nursery rhymesとかold nursery rhymesなのですが、それを省略してナーサリー・ライムなんです。ですから、現代の創作の詩もナーサリー・ライムと言われるわけです（笑）。

楠 本 そう。いっぱい出ていますね、ペーパーバックも含めて。

高 屋 語義が拡散して。

鷺 津 要するに押韻詩。新しかろうが、古かろうが子供のための押韻詩はみなナーサリー・ライム。向こうの人にとっては、読めば、「ああ、これは昔のね」と一目瞭然でわかります。それを知らない日本人が行くと、「ああ、これも」「あ、こんなの、知らない」と（笑）。著者のオリジナルだったりすることはたくさんありますね。

川 戸 古い本もそうで、1870年代に日本に入ってきた英語の教科書にナーサリー・ライムとしていろいろ詩が載っているのですが、それをオーピー夫妻の事典で調べてみると、そこには掲載されていないものが多いんです。1860年代、70年代の英語教科書に掲載されたものでありながら載っていないということは、わたしたちが日本における受容の歴史を考えていく上で、何をナーサリー・ライムと言って、何を言わないか、その区別が非常にむずかしいと、私自身、痛感しました。

鷺 津 それこそ伝承のナーサリー・ライムではなくて、名詩人たちが

作ったナーサリー・ライムを集めた本もたくさんあります。

川 戸 可能性としてはありますよね。

鷺 津 今おっしゃったロセッティや、シェイクスピアまで入ってきたりして、そういうナーサリー・ライム集もあります。そのへんはこちらの知識を試されるといいますか、日本人がそれを見るとき、難しいですね。

川 戸 そうですね。言葉だけを頼りに、それをたどっていってもだめだということです。

吉 本 そういう音とか、ライミングというものを非常に重視しているわけで、どの歌かというよりも、こういう音を子供に教えたいんだということで、新しくても古くても受け入れてしまうという、そういう素地があるのだろうと思うんです。

英語のリズムとマザー・グース

鷺 津 やはりイギリスは文学と言えば散文ではなくて、韻文の歴史ですから、そういう意味で韻律の基本、つまり、リズムの感覚、ライミングの感覚をナーサリー・ライムで覚えるというか、いろいろな詩で覚える。

吉 本 これならナーサリー・ライムと呼べるという新しい歌や詩が、どんどん入ってきていいという、何かそういう感覚があるのかという気がします。逆にそういう寛容さみたいなものが日本の子供向けのものにはなかなかあり得ないのかなという気もします。

鷺 津 日本の文学は韻文よりも散文中心ですものね。楠本先生が言語教育にかかわるマザー・グースのことも書いていらっしゃいますが、本当にそう思いました。

実は私は向こうの子供たちを見ていて、母語として勉強するのにイギリスの子供にとっても英語はとてもたいへんだとつくづく思いました。

高 屋 それはどのように。

鷺 津 つまり先生も書いていらっしゃいますが、アルファベットは表音文字でも表意文字でもありません。ですから英語は、スペリングのグル

ーピングで音を覚えていかなければいけない。その音を覚えるのにライミングというのは非常に大切なのです。

私たちは英語というتماずアルファベットを覚えませんが、向こうの子供たちを見ていると、アルファベットだけを一生懸命覚えるということはないのです。それから発音記号は習わないと言うのです。スペリングを覚えるには、まずデスクはdesk, チェアはchairというように一つずつ覚えていくしかないわけです。その読み方を覚えるのにライミングが重要。

この間、「音で魅せるマザー・グース」というテーマのシンポジウムで吉本先生とご一緒させていただきましたが、そのとき、明治の初期に小泉八雲が自分の長男に使った教材を少し紹介しました。まさにその大部分は文章や詩ではなくて、音節のライミングしている音節の羅列です。八雲自身が新聞に墨で書いて、1年間ぐらい続けたものです。それが終わってからA. Lang の『The Nursery Rhyme Book』を1巻ほとんど全部やったと。

つまり、まず、音の塊とスペリングとを口や耳、目で覚える。それとライミングの感覚。「マザー・グースが英語教材として」と楠本先生が書いていらっしゃるように、向こうの子が英語を習得するのにライミングの感覚がものすごく大事だという考えがあちらの方にあるようです。

そして、ライミングと同時に私が向こうで感じたのは動き、動作。向こうの子供はすぐにスキップするのです。うれしいと言ってはスキップします。遊びでも、先生が「スキップしましょう」と言わなくてもスキップしているのです。

日本の子供はどうかというとスキップが下手ですね。「そんなことはないでしょう」と向こうの人に言われました。「スキップというのは子供が跳ねることを言うのだから、子供は跳ねるものだ」(笑)。でも、日本の子供はめったにスキップしませんし、教えてもらわないとスキップできるようになかなかありませんし、下手です。

そこで私が仮説として出したのは、日本語の音節は母音で終わるものがほとんどですから、力が抜けていては言葉にならない。逆に英語は子音で

終わる音節が多く、力が抜けなくては言葉にならない。もっと言えば、力が抜けないということは、地球の引力に対して全然抵抗がないけれども、力を抜いて上に跳ねるということはものすごく訓練を必要とする。

イギリスでは生まれてすぐから子どもは楽しみながらナーサリー・ライムを耳にし、口にしながら英語の強弱のリズムを身につけていく。それが自然に子供の身体能力にも関係してきて、すぐにスキップになるのだろうという仮説を立てているのです（笑）。

まさにイギリスではナーサリー・ライムが韻とリズムの両面からものすごく重要なものとして言語教育にかかわっている。だからこそなくなっていくかない。

それに比べて、日本語は重く弾まない言語ですし、ライミングもそんなに重要視されませんから、言語教育にわらべ歌を必要としない。だから、すたれていっても別に言語獲得にかかわりがないので、すたれていくように見えているのではないかというのが私の仮説なのです（笑）。

楠 本 面白いですね。私は先生のご本を読ませていただいて、英語は力を抜くことによってリズムが生まれる言語だということを改めて認識いたしました。それに日本語が1拍の言語だということも（笑）。

吉 本 それと関係ないかもしれないのですが、私は1997年に1年間、サセックス大学に研修に行かせてもらっている間に、モリスダンス・チームに参加して練習を一緒にやらせてもらって、パブの前で踊ってビールを飲ませてもらったりしていたんです（笑）。今、ふと思ったのですが、スキップができるということと関係があるかなと。

鷲 津 ほとんど跳ねていますよね。モリスダンスはずっと跳ねっぱなし。

吉 本 あれはものすごいダンスで、ずっとジャンプしっぱなしなんです。

高 屋 笛と太鼓ではないんですか。

鷲 津 いろいろあります。アコーディオンやフィドル（バイオリン）

も。

吉 本 ハンカチを両手に持って、足に鈴を付けて、ずっとジャンプなんです。ものすごくしんどいんですけども。やはり英語の歌詞のリズムに合わせるためにはジャンプしなければならないんだなということを、かなり実感しましたね。それと気づいたことがあるんですが、モリスダンスのジャンプのリズムもタッ、タッ、タッという単調なものというよりタタッ、タタッ、タタッという弱強リズムが多いということなんです。

鷺 津 そうなのです。力が抜けないと！ まさに英語の言語リズムと一緒だという気がしますね。

吉 本 モリスダンスもマザー・グースの歌とは少し違う系統の……

鷺 津 イギリスのお祭りなどで踊る民族ダンスです。

吉 本 私はブライトンの町で活動しているブライトン・モリスダンス・チームというのに参加していたんです。

鷺 津 各地区にモリス団体のグループがあります。それでお祭りのとき、メーデーの五月祭のときにはモリスダンスが来て、いろいろな村で踊りをやります。

吉 本 全国大会みたいなものもあるんです。

高 屋 マザー・グースの童謡集で一番古いので、世界に2冊しかないのですが、大英図書館に1冊、それからアメリカのプリンストン大学の図書館に1冊だけある、『親指トムの…』。

鷺 津 『Tommy Thumb's Pretty Song Book』

高 屋 その挿絵の一つがモリスダンスですね。親指トムが綱渡りをしながら太鼓をたたいて、笛を吹いている図があるのですが、それは今、モリスダンスをされる方の装束とそっくりですね。木版で。

鷺 津 モリスダンスはそんなに古くはないらしいです。中世以降らしいんです。

吉 本 私はなぜあれはモリスという名前なのかということが不思議だったので、当時のサセックス大学の教授などにいろいろ聞いてみたら、

MorrisはもともとMoorishだと。ムーア人の踊りなんだと。

鷺 津 よく外国から来たという話を聞きました。

吉 本 アフリカから来ていますという話が出て、すごいなと思って、確かにアフリカの人はジャンプするなと思い出して(笑)。関係ないかもしれないですが、なるほどなと思いました。

川 戸 アイリッシュダンスだって、基本的には同じように縦の動きですよ。

高 屋 しかし、あの笛はアイリッシュ・ペニー・ホイッスルを使っているようで。

吉 本 私がやっているときはアコーディオンが主でしたね。あと、スティックダンスというのがあって、棒でリズムを取るんです。

鷺 津 ホーンダンスというものもありますね。角を持ってやる。

川 戸 季節と関係するんですか。メーデーなどと。

鷺 津 何かのお祭りのときにはします。

吉 本 何かあれば踊っているの、そのへん詳しくは聞かなかったのですが。

鷺 津 ただ、メーデーのときには必ずどこかでやっています。盆踊りのような感じで。

吉 本 それはありますね。春ごろに。

高 屋 マザー・グースとは何かという本質のところですが、その点に関しては…。

鷺 津 かなり今までに本質が出てまいりましたけれども(笑)。

マザー・グースを授業で

高 屋 では、吉本先生がご自身の教育の中でマザー・グースを取り入れてやってこられたと伺っていますので、その話をさせていただきました。

吉 本 私も先ほど言いましたように1997年に1年間ブライトンにいらして、家族で行ったのですが、子供を二人連れていきました。上が3歳

から4歳にかけて、下が1歳半から2歳ぐらいにかけてで、向こうでナーサリーなどに入れていたのです。英語はそんなにすぐにはしゃべれるようにはならなかったけれども、ある日突然、下の子が、「“Little Miss Muffet”をうたってあげる」と言って、パーッと完ぺきにうたったんで、すごくびっくりしたことがありました。



高屋一成氏

高 屋 「うたってあげる」の部分は日本語で言ったんですか。

吉 本 そう（笑）。パーッとうたって、あ、すごいと思って。

鷲 津 天才（笑）。

吉 本 発音もほぼ完ぺきだったので驚いたんです。やはりマザー・グースの威力といいますか、話すためのいろいろな言葉より先に、リズムとライムの力で完ぺきに覚えてしまうんだということが非常によくわかったんです。

そういう経験もあったので、というのは前置きなのですが、帰ってきてから、ある授業で無理やりにマザー・グースを年間で50曲ぐらい学生に教え込もうと決めました。半期で25曲ぐらい、他のテーマが一応ある授業なのですが、前半を全部マザー・グースにして、1回に2、3曲CDをかけて紹介し、私がうたってみせるんです。そして、「じゃあ、皆で一緒にうたってね」というかたちでうたってもらわけです。最後にうたえるようになってくれないとだめだということで試験をするんです。

鷲 津 先生はどういう試験をなさったのですか。

吉 本 かなり人数がある授業だったのでペーパーテスト、プラス、「うたえるという自信のある人は私の研究室に来て5曲を上限にうたってください。そうしたらプラス点をあげます」というかたちで（笑）。

高 屋 その授業は何人ぐらいが取っていたんですか。

吉 本 年によって上下はあるのですが、40～50の年もあれば、70～80、100ぐらいまでいった年もあるんです（笑）。だから、全部うたわせるのはちょっと無理かなという状況の中で、でも、「ただ覚えるのではなくて、うたえるようになってくれ」ということを原則にやりました。

高 屋 最初の年はそういうことを銘打って授業を始められたんですか。

吉 本 そうですね。

高 屋 生徒が興味を持って、それだけたくさん選択してくれたという。

吉 本 そのあたりは両極あったと思うんです。うたうのが苦手な人はとらなかったかもしれませんが。しかし、毎年それをやっていると2、3割の子は本当に一生懸命うたうのを練習して、完ぺきに何十曲もうたえるようになるのが出てくるんです。

そういう子が卒業生として出ていったり、あるいは在学中も海外語学研修があるので、そのホームステイ先で「マザー・グースをうたったら、ものすごく受けました」という話をしてくれるものですから、これはやったほうが良いなと思って、私もずっと続けているんです。

そういう活動に乗ってきてくれる子は発音もよくなるし、他の勉強にも意欲的になれるという、非常にいろいろな効果があることを体感していますので、そういうことをずっとやってきています。

鷲 津 私もイギリスから帰って以来、ずっとマザー・グースを教材にしてきました。帰国してすぐは短大の英語英文科の学生の英詩鑑賞という授業でやっていました。10年ぐらいやりましたでしょうか。その後、大学に移って、今度は全然違う基礎教育のoral interpretationという科目でマザー・グースを使った授業をして、そのときには大ゴマでしたから非常にたいへんで、多いときは180とか200とか、そんな人数で一斉にリズムにのって言わせるのです。（笑）

英文科を卒業はしましたが、私自身ジャパニーズ・イングリッシュのコンプレックスのままで……。本当に「どうでも英文科」卒業でして（笑）。

幼児番組の歌のおねえさんを長くしていたこともあって、英文科卒業後10年くらいたってから幼児教育をテーマに教育学科に学士編入をし、そのまま、院に進みました。環境によって子供の才能は非常に後々影響を与える。遺伝説、環境説、教育ではいろいろと言われていますが、私はどうも環境説の方が強いのではないかと、自分の経験を通して思っていました。つまり、英語のリズム感も重い日本語のリズム感が身についてからでは、弾むリズム感が身につくにくいのですね。私のコンプレックスの一つでもあったジャパニーズ・イングリッシュ、つまり、英語の発音が下手だ、というコンプレックス。それは力が抜けないからだということを、イギリスの子供がスキップを上手にしたり、楽しそうにchantingしているのを聞いたりして思いました。しかし、日本人には力を抜くというのがどういうことかがなかなかわからない。力を抜くという感覚は、体操と一緒に、体に入り込まないとできないのです。その材料としてマザー・グースを使っているのがoral interpretation。

最初、学生に「大きな声で」と言っても、今の学生はなかなか声を出すのを恥ずかしがって言わないのです。そこで考えて、音声テストをすると言ったら……（笑）。音声テストはLL教室で一人ひとりに全部、テープを吹き込んでもらいます。10分もかからないテストで、短いもの、短か目だけれどちょっと難しいもの、長いものなどの、グループ分けした課題の中から一つずつ選ばせて、三つをやりなさいと。音声テストをするというと、声を出してやるようになりました。

この間、それについての結果をJACET関東支部大会で発表したのですが、英詩鑑賞のころはもちろん英語英文科の学生でしたから、韻律法や内容などもプラスして、マザー・グースを教えていたわけです。そのころは通年授業でしたので、前期でのペーパーテストの結果と音声テストの結果、それから後期でのペーパーテストの結果と音声テストの結果を見ると、音声テストが上がった学生は必ずペーパーテストも伸びている。つまり音声テストが最初からいい学生は後期の成績もそのままいいのはもちろんです

が、悪かった学生の成績がペーパー、音声共に伸びるのです。

「英米語の学生にマザー・グースですか」と大学の先生でよくおっしゃる方がいるのですが、学生自身も最初、「こんな子供の」と思っていたけれども、完ぺきに自分で言えるようにやろうと思うと難しいものだ。

“This is the house that Jack built” なども, “This is the farmer sowing his corn, That kept the cock that・・・” というように言えるようになってくると, 自信がついてきて, そのリズム感が普通の会話や英語の文章を読むときに, あ, こういう読み方で読むと英語らしくなるんだというのがすごくわかる。そういう学生が増えてきたのです。

大学に移って一時、心理カウンセリング学科所属になりました。基礎教育でのoral interpretationを持ちました。基礎教育の学生たちはもともと英語が好きでない学生が多いわけです。そういう学生たちが、しかも大ゴマの180人とか200人。最初、どうかしらと思ったのですが、これが結構、「音声テストやりますよ」と言ってからは（笑）、これは毎回、声を出していないとだめということが分かって……。

しかも力を抜くということがなかなか日本人にはわからないので、こんな授業をしていいのかなと他の先生がご覧になったら思われるかと思うのですが、たとえば音節ごとにストレス、アンストレスを必ず自分で確認して、印をつけさせる。その印どおりに強弱つけて言えているかどうか。これは面白いのですが、ラボなどの英語のチューターの方たちでもできないことが多いんですね。

高 屋 私はできないと思います。自信があります（笑）。

驚 津 “Twin | kle, | twin | kle, | lit | tle | star, | (×) | How | I |
won | der · · ·”, これはまさに強弱，強弱のリズムですね。これが日本人は「トゥインクル・トゥインクル・リトルスター，ハウ・アイ・ワンダー」(笑)。うたうとよけいにメロディに引きずられて，英語の強弱を忘れてしまいがちなのです。

ですから、幼児教育でマザー・グースを使うときにはうたわないほうが

いいという先生もいらっしゃるぐらいです。メロディに引きずられないで chant したほうがいい。

つまり向こうのナーサリー・スクールなどでも chanting させることが多いんです。一つの詩にいろいろなメロディがついているものもたくさんありますし、一つのメロディをいろいろな詩で共有しているものもあります。では、メロディがついていれば必ずうたうかということ、うたわないこともしばしばです。

ですから、“Humpty Dumpty sat on a wall, Humpty Dumpty had a great fall”, ハンプティ・ダンプティにもメロディがありますが、うたわないことも多い。この強弱のリズムがまさに英語のリズムなのです。英語はストレスアクセント、強弱アクセントですよね。日本語は高低のピッチアクセントですね。日本人はそれに引きずられるものですから、「強弱をつけましょうね」と言うと高低になる人が多く、弱音節部も力を抜いているつもりが、力は抜けずに低い音になっているだけという現象が起こるのです。

高 屋 先生、それでCD付きの教材を出してください（笑）。

鷺 津 これはその場にはないと、その人その人によってどこが違うかわからない。たとえば“Twinkle, twinkle”は、極論を言うなら「トゥィン トゥィン」と弱いところは子音だけ、あるいは全くきこえなくていい。それがなかなかできないのです。“How I wonder”は、「ハウ」「ワ」と強音節のみ力をしっかり入れて声を出し、弱音節の「ァ」「ダー」は口だけ動かす。

吉 本 そういうCDを作りたいですね。

鷺 津 これができるようになったら完全に強弱のリズムが身体の中に入っています。

高 屋 小学校の高学年から英語が必須になってきたので。

鷺 津 小学校の先生はたいへんですね。

川 戸 特にリズムの問題、重要ですね。

高 屋 だから、小学校のまず先生方から、小嶋くるみと一緒に勉強し

ましようという教材をぜひ作ってください（笑）。

鷲 津 難しいのは、一緒にその場に立ち会っていないと、頭でできていると思って実際にはできていない人が多いことです。ですから、ラボなど英語教室の先生たちは「やってみましょう」と言うと、できているつもりでも、「高低です、それ」ということが多いのです。そのへんがスキップと関連してくる。ですから、できないと私は学生にスキップさせたり。

高 屋 日本でも1対1で、いろいろお稽古事とか習い事とかの伝授がありますが、家庭なり、そういう機会なりがないと伝わらないという。

鷲 津 まさにそれがイギリスの家庭では行われていて、英語のリズムが身につくのでマザー・グースはすごくいい教材なのです。語彙や音韻を覚えるだけではなくて。もちろんイギリス人にとっては英語の強弱リズムは当たり前ですから、マザー・グースで言語リズムを身につけさせるという自覚は全くありませんが。

高 屋 180人を相手にそれをなさるといのはすごいことです（笑）。

鷲 津 私が180人分テープを聞いていると、助手の人が「よく先生、おかしくなりませんね」とか言われるのですが（笑）、それをやるとやらないでは全然違うのです。

高 屋 すばらしい話です。

楠 本 すごく面白いですね、その授業法。とっても大変でしょうけど。

鷲 津 非常に変な授業をやっております。でも、そのおかげで、「先生のでやったマザー・グースは、他の授業のことは忘れましたが、卒業してから覚えています」という学生が結構います。ですから、イギリスでマザー・グースが子供時代に身につく、大人につながっていくのと同じことを、今、大学で少しやってみようかなと。

高 屋 私なんか授業でやっていることは本当に我流に過ぎないというか。

鷲 津 いえいえ、それはそれでまた価値があると思います。

楠 本 私の所属は経済学部なので、私はマザー・グースを全く皆さん

と違う方法で教育に使っていました。それは講義の「落ち」とか駄目押しという感じなんです（笑）。たとえば「英国の文化と思想」という講義をしたときですが、英国の階級社会の話をします。階級社会に長いことならされた人びとは、甘んじてその境遇を受け入れている。反抗するでもなく、卑屈になるのでもなくて、どちらかというと居直りのような感じで。下の階級の人たちが。そういうことをモリーの幸福感についての意識調査の結果を数字で示したりした後、マザー・グースを使うんです。去年はカルデコットの庶民の側に立ったユーモラスな挿絵を見せながら、“Where are you going to, my pretty maid?” を使いました。花嫁候補を探しに来た中産階級の青年が、「どこに行くの、可愛いお嬢さん」と声をかけます。「乳搾りに参ります」「あなたの父親は？」「農夫です」「あなたの財産は？」「この美しい顔です」「そう、じゃあ求婚できないよ」「誰もお嫁にももらってもらおうなんて思っていないわ」というあれです（笑）。見事切り替えされて、青年は笑いものにされます。青年を村娘たちが愉快そうに見送るのどかな挿絵がいいんですね。挿絵をまじえてマザー・グースで締めくくると、学生が納得してくれるのがわかります。

それから、中産階級が分化して、上層部が増えたのはいいのですが、労働者階級の下層部も増え、最下層にどんどん落ちていく。その貧困の話を数字を使って、貧困線以下の人が何%とか話した後で、たとえばマザー・グースの“See-saw, Margery Daw”の唄を使います。「ベッドを売って、わらに寝た」マージョリー・ドーの話はきっと身持ちの悪い女のことを言っているだけじゃないと思う、と話します。救貧院に入るには、本当に何にもない人でなければ入れない、そういう時代があったことを話すと、すぐく学生がわかってくれるような気がするんです。

白秋が「一切空」と訳した、何もない老婆が巨人に「すう、ぱくり」と飲み込まれてしまうことをうたった詩もありますね。「靴のお家のおばあさん」も、きっと幼子をおおぜい残された未亡人がモデルだったでしょう。英国の社会保障制度は生まれるべくして生まれたと、そんな話を理解して

もらうとき使いました。これは「枕」に使ったと言うべきでしょうか。

“Old clothes to sell, old clothes to sell”, 「何か他に売るのがあれば, こんなことを言っていないよ」という, あの物売りの話なども, その例に使いました。「文化」というとらえどころのないものの話をするとき, 学生たちがほっとするというか, 何かわかってくれたという印象を受けました。ですから, このようにマザー・グースは使えるんだなど。授業を取ってくれた学生たちに裏からマザー・グースを紹介した感じでした。

英語や英米文学専攻の学生に, スキッピングリズムで英語を教えられたら最高ですね, でも, それができない立場だからとあきらめないで, 細ぼそとでしたが自分なりにマザー・グースを紹介できたので満足です。

鷺 津 現在私は基礎教育の学生対象に, 先ほどのoral interpretationと違って, 「マザー・グースを通して見るイギリス文化」という講座をしていまして, それはまさに今, 先生がおっしゃったような。

楠 本 面白そうですねその講座。私は先生の書かれているものにすごく共感しています。きっと楽しい文化論だろうと思います。

鷺 津 イギリス文化の話をするのに, マザー・グースに表現されているものを使って, 行事や風習, 今おっしゃっていた階級制度などを話すと, 非常に印象が強く学生にはわかってもらえるようですね。

先ほどの“Where are you going to, my pretty maid?”でも, 持参金をあてにする中産階級の男性と農家の娘との恋の駆け引き。この恋の駆け引きなんていうのは現代にも通じるものがありますし, そういう意味では非常に学生が興味を持ちますよね (笑)。

楠 本 高屋先生はどのように教育でマザー・グースを生かされていますか。

高 屋 この頃は教育の中で使っているということは特にはないです。十数年前に翻訳書などを調べ始めたときはうれしくて……。いろいろなことがわかるので。土岐善麿の『おとぎうた』へのマザー・グース訳掲載の発見などですが。その頃はよく授業で生徒にマザー・グースやその初期翻

訳を紹介していました。

鷲 津 平野先生にお手紙を出されましたよね。

高 屋 “Humpty Dumpty” の翻訳が載っているなということで、平野敬一先生にお手紙を出したら、熱烈な調子で、「すごい発見だから、展示会の展示に貸してほしい」と言われました。それで、私にも日本国内の受容に関して貢献できることがあるのかなと思って調べ始めたんです。

当時の勤務校で教科書のない授業がありまして、それをたまたま私が持つことになりました。「外国事情」という授業ですが、それを社会科でなくて、英語科の教員が持つことになっていました。文部省検定の教科書がないものですから、その中で毎時間一つマザー・グースを紹介しよう、それだけでなく、自分が発見したことを、「これはまだ誰も知らないんや」と（笑）、プリントに書いたりしようと、という具合にやっていたんです。そんな教材を使ったりして、その年はいろいろ楽しみました。

楠 本 得意のギターをひきながら？

高 屋 ひいたこともあります。

鷲 津 曲はどこから取られましたか。いろいろなメロディがありますでしょう。

高 屋 オーピーのペーパーバックになっている本がありますね。『The Puffin Book of Nursery Rhymes』ですか。それをそのままテープに起こしてうたっているようなのがありませんでしたか、アメリカ人が録音しているもので。「タンタラタン、タンタラタン……Humpty Dumpty…」（口ずさむ）、そういう速さとメロディのです。

それで授業のたびに生徒みんなに、匿名でいいから、感想を書きなさいと言って用紙を配ったんです。そうしたら、「英米人にとって小さいころから意識形成していくうえでマザー・グースは大事だ」とか書いてるんですよ。でも、あるとき、すごく文章を書くのが好きな女の子がいて、「マザー・グースはつまらない」という感想を書いてきました（笑）。

鷲 津 なぜ「つまらない」と書いてきたのでしょうか？ どういうこと

がつまらない？

高 屋 その日の授業では、半分は一緒にチームティーチングをしているアメリカ人の教員に何かしてくださいと頼んだら、ビデオで、アメリカの大自然のすばらしさみたいなのをパーッと流してくれて、皆その映像をワーッと言いながら見たんです（笑）。後半に私がマザー・グースをやったんですが、何か完全に観光のプロモーションビデオに授業を食われたようになってしまったんです。

でも最終的には、3年生の授業だったんですが、卒業までにマザー・グースを含めいろいろな話題を扱ったので、「先生が出したプリントを全部、残しているよ」とか、「プリントを綴じて宝物にしている」とか、そんな感想を書いてくれました。

吉 本 実際に生徒たちと一緒にうたわれるんですか。

高 屋 いいえ、うたってません。テープで流したり、それからAET（英語指導助手）にうたってもらったり。AETが来られないときは、録画してもらって、それをビデオで流したりしていました。AETと一緒にうたったこともあります。生徒には聞いてもらっていただけでした。

吉 本 やはり実際にうたってみて、うたえたという感激を経験させてあがるのがいいんじゃないかと思います。

高 屋 なるほど。今日皆さんからお話を聞かせてもらって、私はものすごく刺激を受けました（笑）。

吉 本 私は前の大学で年末にイベントをやっていて、学生たちにマザー・グース合唱団を結成して出ませんかと言ったら、少し手を挙げてくれる人がいたんです。その人たちが一生懸命練習して、ステージでマザー・グースを6、7曲うたってくれて大いに盛り上がった。そういうことがありました。

高 屋 今、Oral Communicationの授業を3年生で、2講座持っています。2学期はそれに挑戦してみようかなという気がしてきました（笑）。

鷲 津 やはりマザー・グースは自分で口ずさんでみると、その楽しさ

が全然違いますね。

吉 本 輪唱曲の，“Baa, baa, black sheep”，“Three blind mice” などがいいですね。クラスを四つぐらいに分けて，「輪唱，完ぺきにいくまでやるぞ」みたいな感じでやると。

鷺 津 結構，すぐできますよ。

吉 本 意外とすぐできるんです。難しいかなと思うのですけれども。

明治期からのマザー・グースの受容

楠 本 川戸先生は何かマザー・グースで授業をなさっておられますか。

川 戸 私は教育ではなくて，文献学としての関わりですので，自分自身の教育にはあまり使ったことはございません。しかし，日本の英語教育とマザー・グースの関係ということに関してならば，調べたことがありますので，そのへんのことをお話しさせていただきます。

日本では，明治初期の段階で，かなりの人がマザー・グースに接して知っていました。それはなぜかというところ，その頃は，基本的に外来の教科書を使って英語を学ぶということを行っていたものですから，最初の『第一読本』，『第二読本』ぐらいのところにマザー・グースが載っていて，それをとおして知っていたというわけです。

鷺 津 私，川戸先生にお聞きしようと思っていました。NHKの，「龍馬伝」で坂本龍馬が“A, B, C, D, E, F, G”とうたっていましたね。

川 戸 メロディは“Twinkle, twinkle”ですよね。

鷺 津 ですから，あのころはどういう教材で誰が英語を教えていたんでしょう？

川 戸 幕末になると外国製の英語教科書が入ってきますから，確かに“A B C D”を知っていた人は少なくないと思うのですが，それをあんな風に“Twinkle, twinkle”の節をつけてうたうことがあったのかどうか，私としては確認できていませんが（笑）。

高 屋 まゆつばものですね。

川 戸 考証的にどこまで正しいのか、私としては確認していません。ただ、言えるのは、そういう本のかたちでは確実に入ってきていて、幕末期には人々はすでにマザー・グースに接していました。しかも、驚くことに、マザー・グースの原詩や挿絵が、幕末期にすでに日本人の手によって翻刻されているんです。

鷺 津 あれですね。“One, two, …”

川 戸 そうです。それともう一つもっとすごいものがあるんです。それを、今日、持ってきたのですが。

高 屋 本邦初紹介！

川 戸 それは、この『英吉利幼学初編』という本なのですが、『サージェント第一リーダー』の翻刻で、「慶應二年冬新刻」とあります。ここに鷺津先生のおっしゃる“One, two, three, four, five”と、もう一つ、いままで発表されていなかったものが載っているんです。

鷺 津 “I had a little pony”

川 戸 この詩は、オーピー夫妻の事典にも載っていますので、これが日本人の手になる最初のマザー・グースの翻刻ということになります。しかも挿絵までついています。

鷺 津 これは日本のですか。それとも向こうの原版の挿絵を。

川 戸 原版の挿絵です。『サージェント第一リーダー』の挿絵をそのまま翻刻したものです。

鷺 津 これは国会図書館にもなかったのですよ。『First Reader』、探してもない。

川 戸 そしてその次に古いのが、この明治5年に出された『英学捷解^{しょうかい}』という本です。これも『サージェント第一リーダー』を翻刻したのですが、前半部分だけなので“I had a little pony”のほうは載っていません。しかし、こちらでは“One, two, three, four, five”の翻訳が載っています。つまり、これが、現在見つかった日本で最初のマザー・グースの翻訳ということになります。

鷺 津 これは私も国会図書館で見ました。

高 屋 「一、二、三、四、五、私ハ生タルウサギヲトラエル。」

鷺 津 あれです。“One, two, three, four, five, Once I caught a fish alive”, fishがhareになっている。

川 戸 このように初期の英語教科書に掲載されたものをよく調べてみると、楠本先生が、現在最もよく知られているナーサリー・ライムとしてあげられている64編の詩のうち、少なくとも十数編は明治期にすでに入っていて、翻訳もされています。

とりわけ、『Willson Reader』や『National Reader』など、英語を学ぶ人たちがほとんど手にしていた教科書に載っている「きらきら星」などは、多くの人が読んで知っていました。

鷺 津 そして、『Sargent's First Reader』の教科書を江戸末期の寺子屋ではなくて、藩学の小学校の部で使ったりして。

高 屋 この『英学捷解』の原書を、ですね。

鷺 津 藩学でこの『Sargent's Reader』を使ったという記録はあるのです。その本物が私はわからなくて、何が載っているのかなと思って。

川 戸 『Sargent's First Reader』の原本は手に入りません。翻刻のかたちで手に入るだけです。

鷺 津 その『First Reader』を小さい子供たちの教科書として使っていたという資料は残っていたものですから、どういうものが入っているのかしらと思っていたのです。

川 戸 今お話ししたのは幕末から明治前半にかけてのことですが、時代が下って明治後半になると、今度は英語学習教材としてのマザー・グースの価値が目目されるようになって、英語雑誌を中心にさまざまなマザー・グース関係の紹介が行われるようになります。

たとえば、今ここに持ってきたのですが、明治42年に発行された『正則初等英語』という英語雑誌には、今日最もよく知られているマザー・グースの一編である“Hey diddle diddle”の詩がカラーのさし絵つきで紹介さ

れています。その翻訳が大変ふるっていて、「猫が三味ひくチントンシャン、牛は浮かれて月を飛び越へ……」(笑)。

このように日本人とマザー・グースの関係は大変古い。それは、大半が英語教育との関連で受け入れられたものです。明治期の英語教育関連のマザー・グースの資料には、これ以外にまだまだたくさんあります。

今、それをここで紹介するのもいいのですが、今回は、楠本先生のご退職記念の座談会ということですので、何か記念になるようなものはないかと思って、いろいろ調べてみたんです。そうしたら、英語教育とは直接関係のない資料の中に、一つ大変重要な資料が見つかったので、今日はそれを紹介させていただこうと思います。

それは、明治18年の『RÔMAJI ZASSHI (ローマ字雑誌)』の創刊号に掲載されたマザー・グースの翻訳です。例の“Thirty days hath September”という月の日数を覚えるための歌なんですけど、それが「月の大小早覚えの歌」として、『RÔMAJI ZASSHI』の「子供のため」という欄に掲載されています。鷺津先生にみていただこうと思って、今日はそのコピーを持ってきました。

私が驚いたのはその翻訳者の名前です。それを訳したのは、明治15年に矢田部良吉らとともに『新体詩抄』を世に問う外山正一です。彼は、幕末から明治にかけてイギリスやアメリカに留学し、帰国後は、東大教授や東大総長、そして文部大臣まで歴任した人物です。

その外山が『新体詩抄』の発表から3年後に、「月の大小早覚えの歌」と題して、『RÔMAJI ZASSHI』の「子供のため」欄に、マザー・グースの翻訳を掲げている。英語教科書ルートとはまた別の、雑誌に掲載された最も早い翻訳の一つとして注目されます。

楠 本 “April, June, and November; All the rest have thirty-one,” 「四ト六ト九ト十一ハミソカナリ」。(笑)。

鷺 津 “Excepting February alone, And that has twenty-eight days clear,” 「二月二十八、アトハミソヒト」。

川 戸 「ミソヒト」は「三十一」という意味ですね。面白いのは、それが歌になっていることです。もとの歌をイメージして、翻訳が歌になっている。オーピー夫妻の事典には異なるヴァージョンがいくつか出ていて、後半部分が“Twentie and eyght hath February alone, / And all the rest thirty and one”というように、この翻訳に近いかたちのものも出てきます。

鷲 津 それが出たのが明治18年ですか。

川 戸 明治18年6月です。おそらく、英語教科書ルートとはまた別系統の、雑誌や書物に掲載された翻訳で最も古いものがこれだと思います。

高 屋 先生はどうやってそんなことをお調べになるんですか。体は一つしかないのに（笑）。

川 戸 実は、グリムとアンデルセンの作品が、同じように最初は外来の英語教科書から入ってきた。慶應義塾や東京大学系統の学校で使われている教科書なんですけど、そこから入ってきて、英語学習用の教本に最初の翻訳が載る。そして、その教科書ルートを離れて、最初に翻訳が掲載されるのが、この『RÔMAJI ZASSHI』という雑誌でした。

グリムは「羊飼いの童」、アンデルセンは「裸の王様」の翻訳です。つまり、グリムもアンデルセンも、マザー・グースもみな、明治十年代までは、だいたい同じ受容経過をたどっているということがいえるのです。

ただし、マザー・グースの場合はその創刊号ですから、こちらのほうが早い。しかも、それを訳したのが『新体詩抄』の外山正一ということですから、私にとってこれは大変大きな発見ということになります。

そういうことで、今度の座談会で是非これを紹介させていただこうと。

高 屋 これで初めて活字に出ますね。

鷲 津 こういうものが土岐善麿につながっていくのですか。

川 戸 はい、おっしゃるとおりです。要するに、土岐善麿もローマ字運動なんです。もっとさかのぼれば、西周が明治7年に『明六雑誌』で日本語をローマ字で書くことをすでに提唱しています。明治十年代に入って、矢田部良吉、外山正一、神田乃武らによって「羅馬字会」が設立されます。

外国人でいえば、王堂・チェンバレン（B. H. Chamberlain）などもそのメンバーの一人に加わっています。

要するに、日本人は漢字を覚えるのに膨大な時間を費やしている。そんなことはしないで、日本語は簡単にローマ字で表記して、時間をもっと違う知識の習得に使おうと。そうした運動のよりどころとして創刊されたのがこの『RÔMAJI ZASSHI』という雑誌でした。

鷺 津 そのローマ字運動が実はイギリスかアメリカか、どちらか忘れましたが、その外国の戦略の一つだったという話も聞きました。日本語をすべてなくして、ローマ字にしろという。

川 戸 そうだと思います。「羅馬字会」が設立される直前には、日本語をすべて平仮名で表記しようという「かなのくわい（仮名の会）」なども設立されています。「羅馬字会」は、主として洋学者の集まりですから、その機関誌には、グリムやアンデルセン、マザー・グースなどの翻訳が掲載されました。そのマザー・グースの翻訳を行っているのが、東京大学総長や文部大臣を勤めた外山正一であったというのは非常に面白い発見だと思うんです。

さらに、明治三十年代後半になると「ローマ字ひろめ会」というのができて、鷺津先生がおっしゃるように、土岐善麿もそこから『NAKIWARAI』というローマ字歌集を出版します。善麿は、その後も、ローマ字運動と密接に関わって、大正8年には、例の「ハンプティ・ダンプティ」のローマ字訳である「Karrapono Kame（空っぽの甕）」が掲載された『おとぎうた』を出版します。

要するに、子供たちにローマ字を広めるための材料の一つとして、彼は、マザー・グースを利用しているのです。つまり、外山が『RÔMAJI ZASSHI』でやったのと同じことをやっている。ローマ字運動に関わる二人の先駆者が、期せずして行ったマザー・グースのローマ字化、私はその点に大変興味を覚えました。

私は、専攻が比較文学なので、自分の英語教育における実践というより、

そうしたローマ字運動の流れの上からみた、マザー・グースの受容の経過をお話しさせていただきました。これも広い意味で教育に関連する問題ととらえていいものだろうと思います。

楠 本　すごく面白いですね。マザー・グースを通して日本の教育史、言語文化史に分け入れる。

川 戸　これはまだ誰も言っていません。『新体詩抄』という日本の新体詩運動の契機となった本の著者の一人が、マザー・グースの最初の翻訳者でもあったというのです。

高 屋　西洋詩を翻訳した一番最初の詩集ですね。

川 戸　外山正一と矢田部良吉、それに井上哲次郎が加わって『新体詩抄』を発表する。そのうちの一人が3年後にマザー・グースの翻訳を公にする。しかも「歌」としてそれを掲げる。それも、「子供のため」という欄に。

その「子供のため」という欄を参考にして出来たと思われるのが、明治21年に『女学雑誌』に開設される「子供のはなし」という欄です。編集者の巖本善治は、そこにグリムやアンデルセンの童話をたくさん載せていきますが、どういうわけか、マザー・グースの翻訳は載せていません。つまり、そこがマザー・グースと、グリムやアンデルセン童話との受容上の分岐点ということになります。

なぜマザー・グースは取りあげられなかったのか。それは、先ほどどなたかがおっしゃった、日本における物語重視の傾向と関係するのかもしれませんが。あるいは、原詩のもつナンセンスの面白さが、当時の人にはよく理解できなかったということも関係しているのかもしれませんが。

ともあれ、それ以降の一般雑誌や子供向け雑誌においてマザー・グースが取りあげられたという例を私は知りません。明治40年代に入って、竹久夢二が『さよなら』という本の中でその翻訳を何編か取りあげるまで、マザー・グースはほとんど姿を消してしまうというのが、一般雑誌や書物におけるマザー・グースの受容の流れです。

姿を消すということ思い出したのですが、先ほどお話しする機会がなかったのでここで少しふれさせていただきたいと思うのは、楠本先生の「日本のわらべうたとマザー・グース」という論文です。私にとっては、この論文のテーマが一番面白いテーマでした。マザー・グースは、今日なお人々の間に力強く生きのびているのに、日本のわらべうたはどうして過去の遺物のようなものになってしまったのか。

それは平野敬一先生も指摘されているように、明治以降の学校教育がわらべうたのような伝承文化にまったく理解を示さなかったということが、大きな原因だったと思います。あるいは、これも平野先生が言われていることですが、わらべうたのよって立つ「基盤」がマザー・グースの場合より「脆弱」であったということなのかもしれません。

ともあれ、今日、日本のわらべうたはマザー・グースと違い、わたしたちの日常生活からかけはなれた存在となってしまうている。そこまでは、誰もが気がつくことなのですが、では、一体どうしたらそれを今日の世に蘇らせることができるのか。楠本先生の論文は、そこに中心テーマがおかれている。つまり、「再生に関する一考察」というわけです。私が一番興味をひかれたのはその点です。

それは、さきほどの無名性ということと関係するのだと思いますが、わらべうたが生きのびていくには、人々がそれを、絶えず、時代にマッチした新しいものへと作り替えていく必要がある。その再生を、出来るだけ多くの人が参加して行っていく必要がある。それによって、はじめてわらべうたが現代社会に生きのびていくだけのパワーを帯びるのではないか。先生の論文の中で、その方向性が示されていることが、非常に独創的で、私にとっては一番興味深い点でした。

桃太郎の昔話やアンデルセンの童話などをみても、少しずつ解釈や意匠を変えて、くり返しくり返し、絵本やテレビなどに登場してくる。古い昔話や童話がしっかり現代社会に根をおろしている。その点からみても、やはりその方向性はまちがっていないのだと、私自身、納得した次第です。

話が長くなって申し訳ありません。

楠 本 「再生」に関する考察では、長いこと考えていた方向性を私なりに探ってみました。でも論文としては抒情に流れてしまいました。川戸先生のお話面白いですね。日本の教育の中に、生かされてきたマザー・グースということについてもう少しお話しいただけますか。

川 戸 明治も後半になりますと、先ほど申しましたように、英語学習教材としてのマザー・グースの利用価値が注目されるようになって、英語学習雑誌などに、さまざまなかたちでとりあげられるようになります。

そうした動きが最近になってまた復活して、鷺津先生がお話くださったように、英語のリズムを身につけるための教材としてそれを活用してこういう新たな取り組みがなされるようになりました。

私がお話したのは、英語教育にマザー・グースが利用される最初の部分で、鷺津先生がお話し下さったのが、その最新の部分ということになるかと思います。

それをつなげていくと、明治以来の英語教育におけるマザー・グースの利用の仕方の変遷が概略見えてくる。先程来、お話をうかがっていて、そのへんが大変興味深い点だと思いました。

鷺 津 川戸先生に声をかけていただいて『図説児童文学翻訳大辞典第四巻』にそのへんのことを私も書かせていただきました。明治から大正にかけて優秀な英語教師が結構いますのよね。

川 戸 たとえば、長谷川康という。

鷺 津 そのことについて、だいぶ調べまして、この方は今の開成高校の先生だったのですが、先生がお持ちの英語雑誌の中にも訳した、これですか。

川 戸 そうです。この『英語之友』に掲げられた「いぎりすの守歌」という連載です。

鷺 津 『きらきら星』などは、ピッカピッカと非常にユニークなりズムを重視した訳をしています。彼自身が正則英語学校で勉強してまして、

英語を生で浴びて、生のナーサリー・ライムなども非常に英語教育に大事だと。とにかくこのナーサリー・ライムは読んで、暗唱して、口ずさめるようにすることだと言っていますね。私はこれはナーサリー・ライムの原点だと思います。

楠 本 だから、日本英語から脱するにはまずはナーサリー・ライムを覚えることだというのが、すごくよくわかりますね。

鷲 津 そう思います。ある意味で明治時代の英語教育のほうが、今の英語教育よりも英語の本質をつかまえてしていた先生がいたのではないかと。

川 戸 一方で、実用英語教育が叫ばれていた時代でもありました。

明治期のナーサリー・ライム（マザー・グース）に対する理解がどの程度のものではあったか、それを確認するために、ここでちょっと今名前のあがった長谷川康の受けとめ方を紹介させていただこうと思います。

長谷川の解釈の特徴は、それを「守歌」すなわち「子守歌」ととらえていることです。子守歌といっても、当時の理解では、必ずしも「寝かせ歌」ばかりではなく、「目ざめ歌」もあれば、「遊ばせ歌」もある、かなり広いものが含まれていたと考えていいのではないかと思います。

長谷川は、まず、それを「守歌」と受けとめた上で、次のようにナーサリー・ライムの説明を行っています。

ナーサリー・ライムというのは、「無邪気」なことを、「口調」よくいっているだけで、別に「深い意味」などはないのが普通です。しかし、同時に、そこにすてがたい面白味があるものです。だから、みなさんも、意味はともかく、発音に気をつけて、暗誦してごらんさい、と。

マザー・グースの解釈といい、利用の仕方といい、現在のマザー・グースを使った英語教育法にも通じる、実に画期的な受けとめ方ではなかったかと思っています。

鷲 津 面白いのが、『英語青年』でしたか、あのころの英語教師が読む雑誌があって、それをずっとひも解いていくと、「教科書の中に英詩のコー

ナーがあるが、その英詩のコーナーをとばす先生が多い」と長谷川康は嘆いているのです（笑）。つまり、読んで楽しい英詩の強弱のリズムと韻、まさに韻律法ですよ。そのprosodyがよくわからずに、面白みを伝えられる先生がいないからであろうが、抜かして、これは論外である、というようなことを長谷川さんが書いている。

実はその長谷川康という方は面白いんです。今話したように開成中学でずっと教鞭を取っていて、奥野信太郎や藤田圭雄先生も教えてもらっている可能性がある。留学前に藤田先生とお会いしたときに、マザー・グースを研究したいという話をすると、「ああ、マザー・グースは面白いから、いいテーマだと思うよ。ぼくも中学生のころに丸善でマザー・グースの絵本を買ってね、それでそのころからの大ファンなんだ」とおっしゃっていました。なぜそのころに興味を持たれたのか、ひょっとしたら、この長谷川康の影響があるのではないかと。

川 戸 実はナーサリー・ライムを連載する1年前に、長谷川康は『不思議の国のアリス』の対訳を連載しています。当然のことながら、それが日本における『不思議の国のアリス』の対訳の第1号となりました。それも、有名なブランチ・マクマナスの挿絵つきです。

高 屋 『英語之友』ですか。

川 戸 『英語之友』です。ナーサリー・ライムも『英語之友』に連載されていますので、やはり、そういう音声面での英語教育に力を注いだ人だったと思います。

鷺 津 もともと長谷川康は英詩が専門で。

川 戸 そうです。テニスの『イノック・アーデン』の注釈書を出しています。斎藤秀三郎門下の人でした。

鷺 津 斎藤秀三郎の一番弟子ぐらいですよ。

川 戸 かなりの高弟であったと思います。主として民間の私塾や中学校などで教鞭を採っていた長谷川は、1949年に亡くなったときに「町道場のえら者といわれた長谷川康氏も七十二歳を一期として、あの世の人にな

った」という、その死を惜しむ追悼文が『英語青年』誌上に掲載されました。

楠 本 文学部で先生からこういうことを教われる学生さんは本当に幸せだと思いますね。

法政大学とマザー・グース

楠 本 そろそろ時間がなくなってしまうそうなので、法政大学とマザー・グースということについて少しお話させてください。

この経済学部には詩人の山本太郎先生がおられました。画家の山本鼎氏のご子息で北原白秋の甥です。その山本太郎先生が30年近く前の『ユリイカ』の「特集 まざあ・ぐうす」に、「マザー・グースの和訳をやってみたいと思っていたら、谷川俊太郎に先を越された。ちょっと悔しい。白秋には白秋調の、俊太郎には俊太郎風のマザー・グースがあるのだから、ぼくなりやつのやつ、そのうち一つぐらい増えても差し支えないだろう」と、そんなふうに書いておられました。先生は在職中に亡くなられてしまいました。もし先生が訳されていたら、白秋とも、谷川先生とも違う日本のマザー・グースが誕生していたかも知れないと思うととても残念です。

『イギリスのわらべうた』を出された木島始先生も法政の先生でした。詩人であられた木島先生の訳はすてきですね。先生はご退職後、本当にもったいないお年で亡くなられてしまいました。

それから、去年、この経済学部を退職なさったアン・ヘリング先生は、『奇想天外でおもしろいハンプティ・ダンプティの本』を出されています。あれもとても面白いですね。武井武雄先生の絵もいいです。法政大学にはこういうすばらしい先輩たちがいてうれしく思います。

川 戸 さらに楠本先生がいらして。

楠 本 いいえ、私など。私にはマザー・グースはどうしても満足のいくように訳せません。マザー・グースは難しいですね。詩人でなきゃだめ、詩人の要素が必要なんですよ。

終わりに

高 屋 最後にマザー・グースの魅力と今後の研究について皆さんにお話しただこうと思っていたのですが、すでにマザー・グースの魅力について、皆さん、いろいろ語ってくださいました。今後の研究や教育など、興味をお持ちのことについても話していただきました。最後に何かございましたら。

楠 本 マザー・グースというとらえどころのない、大きな大きなものをめぐって、マザー・グースに造詣の深い皆さまと、本当に楽しい時間を持つことができました。

皆さん、教育者でいらっしゃいますので、教室で話せば、それが50人、100人に広がっていくというすばらしい立場におられる方がたです。10年後、20年後に日本でどのように受容されているかと考えると楽しくなります。マザーグースの最初期の受容について、貴重な実物を前に詳しいお話をお聞きできたのも、マザー・グースと英語教育ということについてこんなに深く話し合えたのも望外の喜びです。

先ほどの山本太郎先生が「マザー・グースにあるような遊びの裏に怖い牙を隠したわらべ歌をいつか自分も作りたいものだ」と、どこかで書いておられましたが、マザー・グースの不思議な魅力は日本の詩人たちのあこがれでもあるのだと思います。英国と同じ島国の私たちをこんなに引きつけるマザー・グースのイメージの広がりを私たちも共感でき、それが日本の文化をさらに豊かなものにしてくれることを願っております。

きょうは本当にありがとうございました。司会の高屋先生、ありがとうございました。

高 屋 まだまだ語り尽きませんが、楠本君恵先生のご退職記念座談会をこれで終わりにさせていただきます。本日は暑い中をお集まりいただき、本当にありがとうございました。